

平日の午後。

私以外は誰もいない車両のなかには、朝のラッシュ時とのギャップの大きさもあってか、どこか物悲しさを感じなくもない。

ゴッ

突然の体調不良で会社を早退することになったが、気分の方は、だいぶ落ち着いてきたように思う。

ゴッ

自宅の最寄駅に着くまで、あと一時間近くかかりそうだ。落ち着いてきたとはいえ、疲れていることには変わりなかった。

ガッ

ガッ

少しの間、仮眠でもとるか。

.....。



ん.....?

.....。



.....  
.....  
.....

女の子.....の間に.....

ゴッ

カッタン



仮眠をとっている間に……？ いや、時間はほとんど進んでいない。  
慌てて周囲を見渡す。私とこの子以外に乗客の姿は見当たらなかった。  
ガラガラの車両で、なぜ、あえて私の真正面の席に座っている……？

ゴトッ

ガタン

ゴトッ

ガタン

年の頃は、中学生くらいだろうか。  
中学生……？ ん？  
そういえば、この子どこかで見たことがあるような……。





「あ、これ、親父」  
「これってお前な……」

「え？ あ、え、は、初めまして。あの、えと、陽大さんとその、えっと……お付き……  
や、えと、仲良く……させてもらってる、も、持月ひまりです……。  
あの、えと……お、お邪魔させてもらいます……！」



もい

ら？

ぞい



「あ、どうも。さなっちゃん」  
「ほ、はい。し、失礼します……」

「……」  
「……」  
「何してんだよ、早く上がらな」  
「え？ あ、う、うん……」

もい

もい

もい





そうだ、陽大の彼女……！ ひまりちゃんって言ったっけか。  
陽大が女の子を家に連れてくるなんて珍しいこともあるもんだなと……  
あと、ひまりちゃんが恥ずかしがっている姿がなんとも可愛らしいなど、  
あのときの私は、最高峰に微笑ましい気持ちで有頂天になり……って、ん？

カタン

ゴト

ゴト

カタン

ゴト

……あれ？

ちや、ちよっとちよっと待ってくれ……。



見えてる……？ いや、そんな、まさか……。し、しかし、あの位置に白いモビルス……。いや、布地が見えるということとは、つまりそういうことと解釈して問題ないのか……？

ああ、なんとという豊穣……。ああ……。っす……。いやいや、私は何を言っているんだ。相手は中学生……。ましてや、陽大の彼女だ。

カタン

ゴッ

カタン

チリッ

ゴッ



……え？ こっちを見ている……？

というか、姿勢を変えたのか。先程よりもパンチラ係数みたいなのが  
少しばかり上昇しているような気がしないでもない……。

カチ

カチ

チラ

ゴト

ゴト  
いやいや、冷静になれ。私。相手は中学生だ。  
中学生なんてまだまだ子供じゃないか……！  
子供……子供……。幼き、か弱き存在……。



「陽大くんのお父さんっておいくなの?」  
「え? 40は余裕で超えてると思うけど、なんで?」

「うちのお父さんと比べて、見た目とかすくく  
若く見えるなって」  
「そうか? 普通のおっさんじゃん」  
「え? ぜんぜんそんなことないよ?」

「……はしたないって思われてないかな?」  
「はしたない?」  
「スカート、短くしすぎたかも……」

「それは大丈夫。ああ見えて、親父のやつ、  
筋金入りの糞ムツリスケベだから」  
「……え?」



もしかして、わざと見せているとか……？  
いや、そのようなど都合主義的モツコリ展開……ひまりちゃんにかぎって……。

ガタン

ガタン

チラッ

いやいや、私、よく考える。  
ひまりちゃんとは、たった一度、ほんのりと軽く挨拶を交わしただけの関係でしかない。  
私が彼女の何を知っているというのだ。しかし、目の前の女子中学生とひまりちゃんが  
私のなかで同一人物としてうまく結びつかぬのも事実。  
他人の空似か？ それは、あり得る……！



え？ 脚を開いている……？  
気のせいだろうか。いや、違う。

先程までの脚の角度より明らかに広範囲的……！

カタン

ゴッ

カタン

ゴッ

私にはわかる。そういうところを、私は見逃さない。  
陽太の彼女が……ひまりちゃんが……。  
パンツを見せていないふりをしながら、わざとパンツを見せている……？



いやいや、違う。他人の空似だ。

目の前にいるこの子は、ひまりちゃんに酷似しているだけの、ただの見知らぬ女子中学生……つまり圧倒的、初対面といってしまえる。

断じて私は、陽太の彼女のパンチラを目の当たりにし、

股間を熱くたぎらせているわけではないのであって、だな……。

カタン

ゴッ

カタン

カタン

ゴッ



ああ、またさらに……パンツ……パンツが……っでいやいや。  
よく考える。私。目の前にいるこの子が陽太の彼女であるかどうか以前に、  
そもそも中学生のパンツを見て欲情してしまうなど、あってはならぬこと……。

ガタン

ゴト

ガタン

ガッ

ゴト

それは男として……親として……。  
いや、待て。男としてはありなのではないのか？





なんなんだ、その空々しい表情は……。

大胆な姿勢をとりながらも、別にパンツを見せているわけじゃありませんよ  
といった風情の……しらばっくれていているつもりなのか？

ガッ

ガッ

ゴッ

ゴッ

このまま、パンツを見せているわけじゃないですよといった体で行く気なのだろうか。  
それ以上の発展は……？ いやいや、何を言っている……私……！！



おいおい、両脚を乗っけちゃって……

これはもう見せてないふりって様相ではなくなってきたぞ。  
まずい。股間が……ペニスが熱く疼いてしまつて……冷静になれない。

ガタ

ガタ

カパッ

ゴッ

ゴッ

陽太の彼女に酷似した女子中学生にそんな……いや、しかし……。  
この高次のダブルミーニングというか、女子中学生ってだけでも  
希少価値が極上クラスなのに、かててくわえて、息子の彼女という、  
そして白い……純白の下着……パンツ。チラリズム。  
いや、もはやパンモロのレベルというべきか。



ああ、パンツ。白いパンツ……中学生の、子供の白い綿パンツ……!!  
お嬢ちゃん、わかってるじゃないか。男の好みというものを。

ガッ

ガッ

ど

ゴッ

ゴッ

男が、我々が、女子中学生に期待する下着を的確に選択できている、その感性。  
見られたいんだね……? おじさんのこの私に。はあはあ……はあはあ……。  
見知らぬおじさんにパンツを見せつけて、勃起されて、悦に入っているのかな?  
中学生なのに、君は本当に悪い子だね……。



ああ……これはもう、みずからスカートをめくり上げて……。  
そうまでして見られたいのか？ オカズにされたいのか？

ガタン

ゴッ

ガタン

ゴッ

もしや君は、いつもこんなことをやっているのか？  
男なら誰でもいいのか？ 中学生なんだろう？  
中学生が男をたぶらかせて許されるとでも思っているのか？





まずい。ここは、是が非でも冷静にならなくてはならない。  
この子は、中学生なんだ。背伸びしている子供なんだ。そう、子供……。

子供だからいいんじゃないのか……？

いやいや、違う。そんなことは断じてない……！！

ああ、その視線は……どこを見ているんだい？

私の、私のおチンチン………？

ガタン

ゴッ

ガタン

ピュ

ゴッ



自いパンツ。真っ自の綿パン……余分な装飾やデザインも施されておらぬ、  
じつに中学生らしい決意に満ちた、その粋のよさに  
勃起を催さざるを得ないわけだが……。

ああ、パンツ……中学生のパンツ。そんなに見せつけたいのかい？  
おじさんに見られたいんだね？  
見られて勃起してほしいんだね？





ああ、ひまりちゃん………!!

いや、違う。ひまりちゃんによく似た、女子中学生ちゃん………!!

カタン

カタン

ゴッ

ゴッ

白いパンツが丸見えで、すごくエッチだね………。  
短いスカートをたくし上げ見せつけるその姿勢、本当にたまらないよ………!!  
ビデオにおさめてもいいかな? ダメかしら?



……。ちよつちよつと待ってくれ……。  
お触りしてる……。のか？

カタン

カタン

ゴッ

ゴッ

ひまりちゃんが……。いや、ひまりちゃんに酷似した女子中学生ちゃんが  
パンツを見られるだけじゃ飽き足らずに……。ああ、まずい。だめだよ、君……。  
花の女子中学生に目の前でそんなことをされてしまったら、おじさんはもう……。



「お、お父さん……」

……え？ 今、何か言わなかったか……？  
電車の騒音で聞き取ることはできないものの、口の動きが明らかに  
「お父さん」とつぶやいたようにも見えたのだが……。  
いや、しかし、そんなまさか……。

ガタン

あ

ゴッ

ゴッ

くっ

くっ

ガタン



「お、お父ちゃんも……」

え………

お父ちゃんも………

ガッ

ガッ

はっ

はっ

ゴッ

すっ

すっ

ゴッ

って言ったよな。今、間違いなく……。  
ということとは、君はやっぱりひまりちゃんだったのか……!!  
えいや、待て。ちょっと待った。目の前にいる女子中学生が  
ひまりちゃんだったとして、なぜ、こんな行為を……?」



なんのためにこんな行為を、私に見せつけてくれているんだ……？  
ひまりちゃん、私は君の彼氏の父親なんだぞ？

その事実を承知のうえでなぜ、このような痴態を……？  
ああ、パンツ、女子中学生の、ひまりちゃんのパンツの上から、  
な、なんて卑猥で美しいんだろう……。





「スカート、短くしすぎたかも……」  
「大丈夫。ああ見えて、親父のやつ、口に出すのも  
おぞましいくらいのもツツリスケベだから」

チラッ

「……えっ？」

「ムツツリスケベって……？」  
「部屋に行ってからたつぷりと教えてやる。  
引くなよ？」  
「え？ あ、う、うん……」

じー

あのときのひまりちゃんの視線……。



あれは、明らかに私の股間に熱っぽく注がれていた……!!  
そうか、そうだったのか……ひまりちゃん!

ごめんよ、あのとき気づいてあげられなくて。  
ひまりちゃん、君は私に近づくために仕方なく陽大と交際していたんだね……!!

カタン

ゴッ

チラッ

カタン

くら

くら

ゴッ



お父さん……大好きです……。

ああ、ひまりちゃん……。君の心の声が聞こえてくるよ……！

私も君のような可愛くてエッチな女子中学生が大好きなんだからね。

はだけた服からのぞけるその白い布地は、形状からしてスポーツブラかな。  
中学生らしくて、とってもセクシーだと思うよ……。ひまりちゃん！  
見せて、もっと見せて。君の、ひまりちゃんの、中学生のいやらしいところを……。もっとー！

カッタン

ゴッ

チン

カッタン

くっ

くっ

ゴッ



「お父さんのおチンチンが、見たい……です……」  
ああ……おっぱい！ いいよ、可愛いよ、ひまりちゃん……！！  
中学生らしくじつに慎ましやかなおっぱいだね。美乳でとってもグッドだよ……。

「おチンチン……お父さんの……あつ……」

はあ……はあ……見たいのかい？ 私の、おじさんのおチンチンが。

エッチだね。はあはあ……。ひまりちゃんは、とってもエッチで悪い中学生だね……！！



「あ……お父さんの……」  
ごめんね……ひまりちゃん。こんな皮かぶりの粗チンで……。  
「可愛くて、とてもエッチです……あっ」  
ありがとう……ひまりちゃん。嬉しいよ。

陽太は赤子のときに私の手で割礼した甲斐あってか、ひどく立派なペニスへと成長を遂げているのだろうが、それに比して私のこの情けない有様にがっかりしてないかな？  
フル勃起して、これだよ？ ごめんね……ひまりちゃん。本当にごめんなさい……。

ガッ

あ

あ

は

ゴッ

く

く

ゴッ

く

く